

僕たちがこの小屋にきて七日目の朝。  
マリーが外へ出てくると同時に、すべての作業が終わった。  
——道が、開いた。

「おはようございます」

「ああ。マリー、終わったよ」

「……はい、ありがとうございます」

開通した道を見つめたマリーは言葉をこぼす。

「私……魔女になりたくない」

早朝の冷たい風が、僕たちの間をすり抜けていく。

「どうして？ 君は魔女になるためにここにいるんだろう」

「だって、スミレは魔女のことをよく思っていないよね」

「それは……」

「いえ、今のは私が悪かったです。私が魔女にならない理由をスミレのせいにしたいわけじゃない。私は——」

(あなたの言葉で魔女になりたくない理由を述べてください)

「だから、逃げようと思うんです」

「そう、か」

「その、よかったらスミレも一緒に行きませんか？」





「……ごめん、僕は一人で行くよ」

「私はスマレと一緒にうれしいです……」

「……」

「スマレの料理が食べたい。スマレの絵を見ていたい。でも、これは私のわがままです」

「マリー……」

「そもそも、魔女の問題ですし巻き込んだじゃだめですよ  
ね」

僕はなにも言えなかった。

「スマレ。今までありがとうございました」

「僕のほうこそ」

「いつかまた会えたらご飯、作ってくださいね」

「ああ、会えたら、ね」

「どうか、どうか元気で」

「君は僕にかけられた魔法を知ってるだろう。……大丈夫だよ」

彼女に背を向けたが、一度だけ振り返る。

(あなたの言葉でマリーに別れを告げてください)




僕の言葉を聞き、マリーは眉を下げ、笑<sup>え</sup>んだ。

これから長い長い人生がはじまる。

けれども、それはきっと自由に満ちているのだろう。







スマレを見送ったあと、荷物をまとめた私は走って逃げた。  
司祭はきっと、スマレが開いた道から来る。  
だから山の中を走って、走って、逃げたけれど。



「マリー様、見つけましたよ」

私は司祭たちに捕まった。  
女の足で逃げるには無理があったのだ。  
泣いて嫌がる私を押さえつけ、儀式が行われる。

いやだ、魔女になりたくない。  
そう思っている、肩の痣<sup>あざ</sup>が熱く、体に魔力が巡るのを感じる。

「おめでとうございます、新しい魔女様」

——私は、魔女になった。  
はじめはスマレの境遇を思い返し、良い魔女を目指していた。  
けれども。  
私を無理やり魔女にした司祭たちが、憎くて。  
浅はかだった自分が、悔しくて。  
魔法を持つ者がおそろしいくせに、魔法に縋る人間たちが、  
愚かしくて——。





大都市の街路にあるベンチで絵を描いていた。

「マリーという名の魔女を知っていますか？」

隣に座ってきた女に尋ねられる。  
僕は、キャンバスに運んでいた筆を止めた。

「その魔女がどうしたんだ」

「なんでも悪名高い魔女だとか。この前も村をひとつ焼いたそうです」



「……そう、か」

マリーは逃げ切れなかったんだと、悟った。  
あの日、魔女になりたくないと願った彼女の思いは切実なものだった。



僕はどうしたらよかったのだろう。

マリーの誘いを断ったときの表情を、時折思い出す。  
不安で押しつぶされそうなマリーよりも、僕は、自由を取った。

何十年と絵を描き続け、ついには個展も決まった。  
いまさらマリーに会ったって、僕にできることはきっとない。







女はいまだにマリーの噂話を繰り広げている。  
耳を塞ぐかのようにキャンバスに目を向け、再び筆を持ち上げたけれど——なにを、描きたかったんだっけ。

「雨が降りそうですね」

女の一声に空を見る。  
曇天の空は、まるで僕の心を表しているようだ。

「もう行くよ」

「あなたはスマイレでしょう？ 個展の開催が決まってる画家の……」

「ちがうよ」


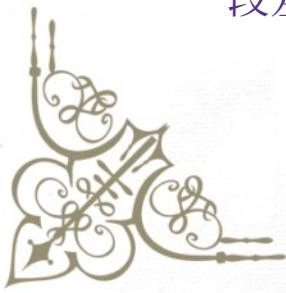
会話を長引かせたくなくて、ウソを言う。  
今はたのしい会話ができそうにないし、この人の話し方はマリーを思い出させる。

「いいえ、間違いないです。その絵のタッチは絶対——」

「それじゃあ」

「待ってください！」

画材をまとめて、キャンバスを持ち、早足でその場を去った。  
雨がぽつりと当たりはじめ、やがて視界が遮られるほどの大雨が降る。  
段差が見えず、足を踏み外し転んだ。





通りがかった人が僕に声をかける。

「大丈夫ですか!？」

まずい。

そう思ったときには遅かった。

擦りむいた手の傷が治るところを……見られてしまった。

「……ひっ」

ひきつった表情のまま、走り去っていく。

ああ、せっかく個展が決まったのに。

この街にも、もういられない。

僕は立ち上がり、ぐちゃぐちゃになった絵画をただ見下ろしていた。

ED2 【滲みだした絵の具の色は】

